# 令和６年度 第２回吹田市文化振興審議会 議事要旨

１ 開催日時 令和７年１月31日（金） 開会：午後6時　閉会：午後８時

２ 開催場所 吹田市役所 高層棟４階 特別会議室

３ 案　件　（１）第2次吹田市文化振興基本計画の進捗管理について

（２）その他

４ 出席委員

| | | |
|---|---|---|
| 会長 | 藤野 一夫 | 芸術文化観光専門職大学 副学長 |
| 副会長 | 加藤 義夫 | 宝塚市立文化芸術センター 館長 |
| 委員 | 芦田 稔 | 公益財団法人吹田市文化振興事業団 事務局長 |
| 委員 | 西田 晴美 | バレエ指導者（ハルアンジェバレエ代表） |
| 委員 | 三原 満里 | 吹田市文化団体協議会 会長 |
| 委員 | 中根 佳江 | 千里金蘭大学教育学部教育学科 講師 |
| 委員 | 馬場 英朗 | 関西大学商学部商学科 教授 |
| 委員 | 福留 和彦 | 大和大学政治経済学部経済経営学科長 教授 |
| 委員 | 金關 実和子 | 市民委員 |
| 委員 | 成清 北斗 | 市民委員 |

５ 公開・非公開の別 公開・非公開

６ 傍聴者　なし

７ 会議進行

【（１）吹田市政策ビジョン－第2次吹田市文化振興基本計画－の検証・評価について】

（A 委員）　資料１の大綱１・2において、コロナの影響はあったものの入場者数は年々増えている。定量的な数値で見ると、増加していることから「a」評価と判定してもいいのではないか。そのような議論はしなかったのか。

（事務局）　令和3年からコロナの影響があったため、同じ条件で評価するのが難しい期間であった。

「a」評価をした場合、現在の事業がコロナの影響を受けながらも十分に達成できているという判断となることから、全体的に「b」評価に偏っている。また、「a」評価が最高得点であり、コロナが明けて入場者数が増えたのは行政の努力なのか判断が難しいことから厳しめの自己評価となっている。

（A委員）　評価の「a・b・c」は市の統一した基準か。

（事務局）　当初、各室課へ事業評価の依頼をした際に「a・b・c」評価の 3 段階としていたことから、3 年間は評価の段階を統一している。また、過去の審議会の意見で「s」評価を入れてはどうかという意見もあったが、途中で評価の基準を変更するとブレが生じることから、この3年間は3段階評価にて経年変化を追っている。

（B委員）　評価の「a・b・c」は 100 点満点で評価しているのか。点数化した評価なのか、あるいは各所管の感覚的な評価を採用しているのか。

（事務局）　資料 3 のとおり、判定基準「c」評価は今後検討が必要としているため文化振興において課題があるという評価。「b」評価は計画通り事業が進んでいるという評価。「a」評価は計画以上の進捗でありこれ以上は改善の必要がないというような評価。数値的な評価はしていない。

（B委員）　目標設定をして概ね達成された場合は「b」評価か。期待値より大きな成果が得られた場合は「a」評価か。「b」評価で概ね達成していると評価しているが、本来は目標達成できていれば「a」評価が妥当ではないか。数値化された評価でないため、抽象的な評価になっている。

（事務局）　「a」評価が十分な成果を得ているとしている事から、十分な成果がどのレベルを指すか判断が難しい部分もあるが、期待を上回る成果を得ている場合に「a」評価としている。市の

総合計画においては「SからC」までを判定基準としており、文化振興基本計画における評価についても次回の策定後6年目評価の際には判定基準の見直しの検討可能。ただし今回の3年目評価は現在の判定基準で答申いただきたい。

（C委員）　判定基準において、どのような目標を持ち、何をもって「b」評価としているか見えてこない。大綱２を例に挙げると「吹田市民の第九」の入場者数が令和３年度から増加しているから「b」評価なのか、それとも市民参加に対して大綱の目標を達成するための仕掛けづくりを行い、その取組に対しての評価なのか、この資料を見ただけでは分かりにくい。

（事務局）　入場者数のような定量的な数字を取ることが文化の活動として良いのか計画策定時も議論はあったが、今回の計画では明確にしない方が良いのではないかという議論があり、定量的な数字を評価の判定基準としなかった経緯がある。１事業ごとに見ていくと、どこを目標設定にするか難しい部分があり、今回このような判定基準となっている。

（C委員）　他市の文化施策事例を参考にし、他のアプローチ方法があったのではないかというような検討もできたのではないか。

（事務局）　吹田市民の第九を例に挙げると、長いスパンで事業が実施されており、大学で音楽を教えている先生が初心者でも歌えるような練習が組まれており、大綱２「文化を未来へ−つなぐ」にあるように文化・芸術を支える人材の育成に寄与している。そのため、評価についても大綱の目標に対して事業ができているかという判定基準となっている。

（D委員）　先ほどの内容は文化スポーツ推進室として把握されている事業の説明でありイメージできるが、全事業各室課での評価については基準が明確ではないため分かりにくい部分がある。ただし、現状としてこの資料を見る限りで大綱に対して事業ができているのか審議会で評価する必要がある。

（A委員）　確かにこの資料はあくまでも各室課における自己評価であり、我々はこの資料を信じるしかできないが、前回も意見として出ていた審議会委員の事業モニタリングとして視察を行い、レポート作成し審議会委員の評価と市の各室課における評価について比較する方法も検討したい。

（事務局）　審議会の開催と視察できそうな事業が同じタイミングで実施されているケースが少ないと思われるため、市で複数の事業をピックアップして日程を各委員へ案内するという方法も考えている。

（E委員）　審議会として事業ごとに評価するのか、あるいは吹田市全体の文化活動に対して評価するのか2つの評価の仕方がある。各事業においても人と人との関わりや市の公共施設に対してどのような関わり方があるのか、もっと違う使い方ができるのではというような議論もできる。どのような人たちがどのような事業でどういう風に繋がっているのか、この資料から汲み取る事は可能であるが、それを分析した資料が必要ではないか。

（F委員）　審議会においては、業績評価となるため大綱に向かって事業がどのくらい達成できているか評価となる。実際のモニタリング評価に加えて業績評価という複数の評価視点から見ることも必要だと思う。

（G委員）　吹田市文化団体協議会は来年70周年を迎えるが、やはり高齢化が顕著に表れている。価値観が違う中でどのように吹田の文化を若い方へ繋いでいくかが課題となっている。

（H委員）　バレエ業界でも同様に、芸術は個人の感性による感じ方であり点数が付けることができない。文化の場合はスポーツのような点数で評価できないことから評価の仕方が難しい。

（I 委員）　評価がなければ前進はしない、成果と課題を見極める必要がある。資料にもあるように日本人特有の評価が真ん中に寄りやすい傾向が顕著に出ている。次回、判定基準を見直す際

はより細かい段階が必要ではないか。

（J委員）　伝統的な文化の型やお手本があるものについてはコンクール等ある方が良いと思うが、新しい価値の基準を作っていくような事はそこには当てはまらない。また、若者が伝統文化に興味をもたないといった話も耳にする。

（会　長）　今回は、事務局作成の「a・b・c」評価した資料をもとに答申を行いたい。答申については全体を総括した内容でも良いが、より詳細に答申するのであれば大綱ごとに評価をする方が良いのではないか。

（事務局）　この場で答申案をまとめず、事務局と会長で協議のうえ最終案を作成したうえで、各委員へ共有し、答申を決定することは可能。

（会　長）　会長と事務局で協議の上、各委員へ答申案を共有し決定することで良いか。

（各委員）　異議なし。

【（2）その他】

（事務局）　今後の計画の進捗管理・評価において審議会委員による事業視察も一つの方法であると考えている。平日の勤務時間中に実施される事業が多く、審議会として委員全員の日程を合わせることは難しいと考えるため、視察候補の日程を各委員へ周知し参加可能な日程で視察・評価いただきたい。

（A委員）　他市では事務局にて複数事業をピックアップしたうえで、各委員２つずつ事業視察を行い、レポートを提出するような取り組みを行っている。近隣に住んでいる方は10回くらい視察に行かれているような場合もあり、委員それぞれ視察回数に差はあるが視察を実施している。吹田市でも審議会委員による視察を行う方が良いと思うがどうか。

（E委員）　吹田市政策ビジョンにおいて「景観」についても組み込まれているため、現地視察は必要。

（A委員）　回数についても大綱が3つに大きく分かれていることから、年間 3 回くらい視察する方が良いと思う。視察に係る予算についても事務局で検討してほしい。

（事務局）　各委員の意見をまとめると視察については実施し、視察回数は年 3 回程度行いたいということで良いか。また、視察事業についても事務局でピックアップした事業を複数提案する形で問題ないか。

（各委員）　問題ない。

【閉会】